

一 比叡山北谷持法坊に兒あまたあり、冬の夜豆腐一二丁を求め、田樂にする。老僧いひ出されけるは、をのくゝまうくをいふてくふべしと、大兒やがてわれは佛のつふりと申さん、三くしとりてのく、又ひとり八日の佛とてやくしとりたり、後に小兒屏風のあけより出るを見れば髪をばつとみだし、たすきをかけ、左右の手にて目口をひろげ、我は鬼なりみなくはうとあり、たけ取たれば、せんかたなさに、坊主はふるき手ぬぐひをあたまにかぶり、手をさし出し、乞食に参りた、壹つ宛おもらかしあれと、老僧のはたらき三國一。

〔諸艶大鑑二〕男かと思へばまねぬ人様

土手の下道にかゝり、観音堂の表門を壹町計北のかたへ行て、簾掛籠たる水茶屋あり、此内に入せけるに、數多はしたの女房こしもと御小袖をめしかへさせ、御手拭とり奉れば、又あるまじき若後家なり、

〔後はむかし物語〕京都の人ほうはべ和らかにて、心ひすかしなど、さみする人多し、江戸もの、心持には、さ思ふべき道理もあれども、又江戸もの、及ばぬことも多し、おもふに物の流行、江戸は足早く、京都は足遅し、十年跡寛政六年頃に京に登りて見たるに、帶の幅せまき、笄の長き等、江戸にてむかし流行せし事、其まゝにて有やうに思へり、主人と下女の髪は是非おなじうせず、頭に物かむらぬは、道のものに紛るとて、只うどは帽子をかむり、町家の外は被をきる也、尼も是非帽子かぶりて頭を顯さず、山下惣右衛門といふ男、京よりはじめて江戸に來り、其尼の物かむらす羽織著たるを見て驚きたり、況手拭をかむりたる女などは、曾て無き事なり、是守りの正敷所なり、

〔諺話浮世風呂 四編上〕秋の時候

眞田の腰帶は男がしめて羽織をはさむ、晒の手巾は女中衆がかぶつて、野遊に出る、

〔當世風俗通 前編〕手巾